

# 長畝ふるさと通信

【2017年11月号】

## ■ 稲の力



写真は今年から取り組んだWCS(稲醜醜粗飼料)の刈り取り後の田んぼです。8月中旬にきれいに刈り取ったのに、11月にはボクの膝丈ほども伸びて、空っぽながらモミまで付いています。その間、肥料や水を与えたわけではありませんが、大地の生命力はたいしたもんだと感心するばかりです。

JA佐渡では「究極のコメづくり」を目指し「佐渡自然栽培米研究会」を立ち上げ、本格的に「自然栽培米」づくりに取り組みを始めました。自然栽培とは農薬や化学肥料はもとより、有機肥料(家畜糞、魚粕、油粕など)も一切使用せず、自然界のエネルギー(太陽、土、水)で栽培して土壌環境(微生物)とお米そのものが本来持つ力を発揮させようとする栽培方法です。簡単に言うと自然界の木や草花は農薬や化学肥料が無くても育つので、これを田んぼでもやろうと…決して手抜き「放置栽培」ではありません。光合成細菌を活用する栽培方法が有効と言われています。

## ■ 陳情 地域資源の循環活用を！

もみ殻にケイフンを混ぜ、肥料とする実験事業に圃場提供して3年が経過しました。佐渡の稲作肥料はほぼ全量、島外からの輸入に頼っています。化学肥料はもとより、家畜がない(牛はいますが頭数が少なく、鶏・豚はいませんから)ため、有機質肥料もないのです。そこでコメ生産の廃棄物であるもみ殻や米ぬかを利用して堆肥化できないものかと考えたわけです。ケイフンは島外からの輸入になりますが、安価で低コスト化するには最適です。3年間の取り組みでは肥料として十分活用できるデータが取れましたが、問題は生産と散布にかかるコストです。大量生産すれば生産原価は下がりますが、そのための施設など新たな投資が必要になります。また、運搬費や散布費も含めるとどうしても採算ベースには乗らないのです。そこで、佐渡市長に関係者で陳情に出かけ、継続して支援と予算計上をお願いにあがった次第です。「佐渡でしかできない地域資源の循環を実現したい。その先頭に市が立って、新たな佐渡ブランドを確立してほしい」と訴えました。市長からはもみ殻だけでなく、食物残渣や牡蠣殻、焼却灰なども活用しながら地域資源の有効活用を検討したいとの回答をいただきました。もみ殻堆肥散布の様子



ケイフンの臭いが結構キツイ

## ■ 収穫感謝祭

11月25日、収穫感謝祭を開催しました。「今年は平均反収1俵減という残念な結果となりましたが、無事に収穫を終えたことに感謝し、今日一日楽しく過ごしましょう」とは組合長の弁。毎年100人近くが集う感謝祭ですが、今年は天候の影響もありいつもより少なめ。特に組合創生からの「第1世代」の先輩方(80~90歳台)の姿がめっきり少なくなりました。ボクとしては普段、酒を酌み交わすことがない先輩方との会話は楽しみの一つだったんですけど…。

一方で30歳台の「第4~5世代」は子供連れで大賑わいです。組合や農業の話は出ませんが地元愛は強いようで、これからの長畝集落は安泰だなと安心しました。

散会后、後片付けを終え、すっかり酔っぱらって近所の仲間のお宅へ二次会に向かう道すがらポケットに何故か入っていた青い球。「きらきらと光ってきれいだな~」と思いつつ、歩く道先はぼやけてフラフラ。まるで将来を暗示するかのようでした。二次会のお宅では何を話したか記憶は定かではありませんが、朝起きるといつものようにコタツに大の字になって、その横には猫が寝ていました。



たか記憶は定かではありませんが、朝起きるといつものようにコタツに大の字になって、その横には猫が寝ていました。

12作目の100人鍋、はじめて味噌仕立てにしてみました。アレンジを変えればあと10年はいけそうです。この鍋も組合の象徴かもしれませんな。

## ■ 冬が来る



11月も立冬を過ぎると、急に日が短くなってきます。午後4時頃には西の山陰に鮮やかなオレンジ色の夕日が沈みます。5時にはもう辺りは真っ暗です。金北山も中腹まで雪が積もり、天気の良い日は早朝、田んぼに霜が降り氷の世界が現れます。

トキや白鳥やサギ、トビやカラスといった鳥たちが集団で田んぼに舞い降り、エサを食べている姿が目立ちます。佐渡の生物多様性は着実に広がりを見せているのです。

来年は国の生産調整がなくなる農業の大きな変革期の年です。ふるさとに寄り添い、地域の力を借りながら何とか沈まぬよう頑張ります。

少し早いです、皆様には今年も大変お世話になりました。来年も皆様にとって明るい年であります様、心から祈っております。良いお年をお迎えください。